



休憩室



川崎ゆきお

一室と言うより、物置のような場所だ。この会社には、そんな部屋があることを白石は知らなかった。同僚の佐竹に誘われて休憩にきたのだ。つまり、喫煙場所だ。ただ、灰皿は置いていない。

白石は、その後たびたびその部屋へ行くようになった。煙草を吸いたくなかったので行くわけではない。喫煙室が別にある。だから、吸いたければ、いつでも吸える。社長がどうも煙草好きのようで、自分の首を自分で絞めるようなものなので、社内全面禁煙にはしていない。社長室には大きな陶芸品のような灰皿がある。

さて、その一室には先客がいた。倉石といううだつの上がない先輩だ。

「ここに来るようなら、白石君も別の生き方に目覚めましたね」

意味が分からない。生き方なのだから、人生規模の話だ。そんな大層なことが、ここにあるのだろうか。ただの物置というか、持って行き場所のないような、いらぬものが積まれている。とりあえず、使わないものや、いらぬものは、ここに置くことにしているようだ。

「別の生き方とはね。こういった休憩場所での生き方なんだ。もう望みは、そういうところにしかない。目的も、このあたりにしかない」

「どういう意味でしょうか」

「意味？」

「はい」

「いや、もう意味など見いだせなくなったということですよ。この会社ではね。私はもう果てた。あとは、どうやって過ごすかだけで、省エネに努めることだけが目的となった」

「退社するのですか」

「そんな権限は会社にはない」

「でも、リストラって、あるでしょ」

「希望退職だ。私は希望していない。だから大丈夫だ」

「この部屋でお仕事ですか」

「見れば分かるだろ。休憩しているんだ」

「ああ、そうですね」

「まあ、この部屋は来るようになれば、君もそろそろだ。ここはそういった素質のあるものが、不思議とかぎつけてやってくる部屋だ」

「僕は、佐竹に誘われて……た」

「佐竹君も同類だよ。君も同類かと思い、連れてきたんだ。それは、君に隙があるからだ。同類と思われたのだ」

「同類って？」

「だから、うだつだよ。それがまずあがらない。仕事は出来るほうではない。真剣に働く気がない。何とか首にならない程度にやり過ごせばいい。そうでしょ。君も」

「多少は、そんな面はありますが、それは僕はあまり積極的な人間ではないので、これは性分です。仕事はそれなりにやっています」

「それなりだろ。それなり」

「ああ、多少は頑張ることも」

「だが、ここでの仕事、それほど面白いとも思っていない。出来る人間のほうが多い。このままでは、大して出世はしない。だから、無理をしても似たような結果にしかならない。だから、省エネでいこう。そういう気持ち、君にはあるだろ」

「いえ、まだこれからですから」

「で、何しに来たんだね。ここへ」

「はい、ちょっと休憩で」

「休憩時間じゃないでしょ」

「煙草休憩です。喫煙室でないと吸えないので」

「そうか。しかしここは喫煙室じゃない」

「はい、何となく、呑気そうな場所だったので、つい」

「まあ、いいでしょ。君も同類だ。仲良くやりましょう」

「あ、はい」

ある日、白石は同僚の佐竹に、あの部屋の秘密を聞いてみた。

「あれ、行くようになったの。僕は、ちょっと見せたかったの、連れて行っただけでね。どうだい、面白い生き物がいるだろ」

「いつもあの部屋にいる人、誰なんです。社内であまり見かけないけど」

「室長だよ。あの部屋の」

「部屋って、あそこ物置でしょ」

「で、室長とよく話すの？」

「行けばいるから、いろいろ話をしてくれますよ」

「それはまずいなあ」

「まさか」

「え、気付いた？」

「何を」

「気付いてない。じゃ、いいよ。そのほうが」

「教えてよ」

「あのの部屋は、物置になるまでは、課があったらしいんだ」

「課って」

「第二庶務課」

「じゃ、あの室長は」

「課長だよ」

「でも、その課はなくなったんだろ」

「立てこもっているんだ。あの課長。籠城さ」

「ああ」

「話はそれだけさ。面白そうだから、見せてやったんだよ。見学さ」

「安心した。僕だけが見える室長で、ホラーかと思ったよ」

「そんな怪談はないよ。あるわけないだろ」

「そうだね」

「いつまで、あの課長、持つかなあ。それだけだ」

「うん、分かった」

了